



14:00 放鳥式典

コウノトリの郷公園内の特設テントで三江小学校児童などの合唱を皮切りにして、放鳥式典が始まった。中貝市長が地元を代表して喜びのことばを述べた



12:15 報道陣到着

テレビ局、新聞社、出版社など多くの報道陣が押し寄せ、会場の随所で取材活動が行われた。韓国、ロシアなど海外メディアからの取材もあった



14:07 木箱設置

コウノトリが入った木箱が軽トラックで放鳥場所に移動され、コウノトリの郷公園職員が、一つずつ慎重に所定の場所に設置した



12:32 見学者続々

一般の見学者も正午ごろから集まり始め、早くから撮影場所を確保した。シャトルバスの出発地であった豊岡総合庁舎駐車場では長蛇の列ができた



14:30 放鳥
秋篠宮ご夫妻が1つ目の木箱を開けると、コウノトリが勢いよく羽を広げ飛び出し、観衆から大きな歓声が沸き上がった

9.24 コウノトリ自然放鳥 ドキュメント

34年ぶりにコウノトリが大空に向けてどのように飛び立つか?
約3500人の観衆は期待と不安を合わせ持ち、固唾かたずをのみながらその瞬間を待った
人間とコウノトリとの新たな挑戦が始まった



14:40 コウノトリ舞う
放鳥されて大空を優雅に舞うコウノトリ。5羽ともしばらぐする
と郷公園に戻り、羽を休めた



14:49 観察
放鳥したコウノトリを観察する郷公園職員。現在もコウノトリ・パークボランティアなどの協力を得ながら地道な観察活動が続けられている



14:45 感動
三江小学校、小坂小学校の児童も放鳥会場に駆け付け、コウノトリが舞う姿をいつまでも見つめていた

コウノトリの野生復帰が目指すもの

豊岡市長 中貝宗治



1. コウノトリとの約束を果たす

1965年、絶滅に向かつて減少するコウノトリを救う最後の手段として、野生のコウノトリを捕獲して檻の中に閉じ込めたとき、私たちは「いつか、きっと空に帰すこと、約束しました。

2000年9月24日、環境の悪化によって日本において一度は絶滅したコウノトリが、40年に及ぶ人工飼育を経て、再び豊岡の空にはばたきました。

一度絶滅した野生動物を飼育下で繁殖させ、もう一度、かつての生息地である人里に帰していく

2. 種の保存に関し 国際的な貢献を行う

かつてコウノトリは、人里に暮らす鳥でした。コウノトリが里山に巣をつくり、空を舞い、水辺でエサをついぱむ姿は、当たり前のありふれた風景でした。種としてのコウノトリを「本来の場所」に帰すこと。それは世代を超えて受け継がれてきた「豊岡の願い」です。

これは、大変な時間とエネルギーとコストのかかる事業です。豊岡はなぜコウノトリの野生復帰の取組みを続け、何を目指しているのか。

ムール川(中国の黒龍江)中・下流域を主な繁殖地とし、中国の中南部や韓国、台湾、日本に渡って越冬し、環境が良いれば留鳥化していた鳥です。しかし、生息環境の悪化によってその数は減少し続け、現在の生息数はわずか2,000羽程度といわれています。

コウノトリは絶滅の危機に瀕しています。地球上に生息する多くの野生動物が絶滅の危機に至っている今日、コウノトリを絶滅から守ることは、国際的にも大きな課題です。豊岡は、この国際的な取組みの輪に参加してきました。

同時に、コウノトリを暮らしの中に受け入れる文化の創造も大切です。コウノトリを絶滅に追いやつた環境破壊は、実は私たちの体に深く染み込んだ生活様式と価値観(文化)が引き起こしました。

環日本海の国々が連携し合い、協力し合わなくてはなりません。すでに、豊岡も含め国内外にコウノトリの飼育施設が建設され、情報の交換や、伝的多様性を保つための管理が進められています。豊岡は、

日本最後のコウノトリ生息地として、今後とも種の保存に関する国際的貢献を果たしていきたいと考えています。

3. コウノトリも住める豊かな環境を創造する

「境」であるにちがいありません。コウノトリの野生化をシンボルとしながら、私たちはコウノトリも住める豊かな環境(自然と文化)を創造していく

この取組みを続けていくためには、経済的にも自立することが大きな課題です。コウノトリ野生復帰の取組みと経済活動が相互に共鳴しながら互いを高め合っていく、持続可能なまちづくり。その道のにはさまざまな困難もあるでしょう。しかし、「コウノトリ」にこだわって取り組んできたこれまでの歴史が、市民の自信となり、今後も「豊岡型」を貫くことで、国内外の連携がより深まって新しい時代を切り拓いていくものと確信いたします。

人口規模は小さくても、世界の人々に尊敬され、尊重されるまち、「小さな世界都市」の実現に向かって、豊岡は挑戦を続けます。

共生を真剣に考えるとき

NPO法人コウノトリ市民研究所 上田尚志さん(江本)



「コウノトリの野生復帰」に向けた大きな節目、自然放鳥が無事に終わりました。私もその瞬間に立会いましたが、大空を飛ぶ姿は実に美しかったですね。自然放鳥でコウノトリが市民の見えるところにやつてきました。いよいよコウノトリと人間がどのように共生していくのか真剣に考えなければなりません。

最後の野生コウノトリが捕獲された昭和40年代と比較すると多くの水辺環境が失われ、厳しい自然状況にあります。しかし、里にはメダカやホタルなどの生物も生息しており、自然の息の根は止まっています。湿地や沼地、小川などを何らかの方法で復活させればコウノトリの住みやすい環境は再生できます。

NPO法人コウノトリ市民研究所

コウノトリ野生復帰計画を市民の立場で支援するため平成10年に設立。生き物調査、ビオトープづくり、里山林整備など、市民レベルでできる活動を展開。同研究所の主役は子どもたちで、「田んぼの学校」など子どもを対象にしたさまざまな月例行事を実施している。誰でも自由に参加可。

問合せ コウノトリ文化館 ☎23-7750

市民研究所が主催する「田んぼの学校」で、川や田んぼに入つて虫や魚を追いかける子どもたちの表情はとても生き生きとしています。その表情を見ていると、子どもたちにとって自然とのふれあいはとても大切なことだと実感します。

今後も、コウノトリを象徴とした豊岡の自然環境について、子どもたちや一般市民の皆さんとともに、自ら考え、学んでいきたいと思います。

冷静に温かく見守つて

コウノトリパーク・ボランティア 西村英子さん(栄町)



息子がパークボランティアの1期生で活動している様子を見て、これはおもしろそうと翌年から私も参加しました。小学生の時に見た最後の野生コウノトリの姿と、「滅びゆくものはみな美しい。しかし、滅びさせまいとする願いはもつと美しい」という阪本元県知事の言葉が心の片隅にあり、コウノトリと関わりを持ることはとてもうれしいことでした。

3年前に豊岡に野生コウノトリ「ハチゴロウ」が飛来してからは、週半日ですが行動観察に出かけました。居場所を探すうちに見かけた、キジやカワセミの美しさ、ヒバリの擬態、セキレイのダンス。今まで気づかなかつた木々の色づき、霧の壮大さ。観察は

野に帰されたコウノトリには、幾多の試練が待ち受けています。皆さんの近くに飛来したときはどうか、冷静に温かく見守つてください。

放鳥したコウノトリが松の木で子育てをして、そのヒナがえさを食べて大きくなり、ほかの個体間の関係がとても興味深いです。

子どもたちの声

三江小5年 瀬河美紀さん



放鳥の後、みんなが国際かいぎの打ち合わせで学校に帰つても私は郷公園に残つてました。すると私の頭の上をコウノトリが飛んでいきました。私はとても感動しました。この様子をクラスのみんな、できれば全国の人見せたかったです。世界が注目するコウノトリが住む三江地区はとてもすばらしい所だと思います。ここに住んでいて本当によかつたです。



三江小5年 田口優香子さん